

旧約聖書の聖書諸翻訳を巡って： 翻訳に多様性がある理由とは？

1 はじめに： 翻訳を巡るあれこれ

私と翻訳聖書

翻訳と聖書

- ・聖書と翻訳の営みは切り離せない。既にバビロン捕囚後の共同体において、モーセ五書が何らかの仕方でも翻訳されて説明されていた可能性がある（cf. ネヘ 8:7-8, アラム語への翻訳？）
- ・紀元前 3-2 世紀頃には、既にモーセ五書がギリシャ語に翻訳されたと考えられる。
- ・宗教改革の時代において、ルターはドイツ語訳の聖書翻訳を生み出した。「ドイツ人への最も偉大な贈り物」(Die Bibel nach Martin Luthers Übersetzung 2017, 序文より)。
- ・現代に至るまで、様々な言語で、聖書翻訳が生み出され続けている。

どうして翻訳が違うのか

単語の意味に幅がある場合

例： 「ツェダーカー」(特にイザヤ書における) の訳 (下参照)

文法的判断が難しい場合

例： 哀歌 5 章 22 節の訳 (下参照)

本文批評的問題がある場合

例： イザヤ書 53 章 11 節の訳 (下参照、「ここが変わった」106-110 頁)

日本語の問題がある場合

例： 「ナハラー」の訳(「嗣業」or 「相続地」、「ここが変わった」111-114 頁)

翻訳理論の違い

形式的等価 (formal equivalence)

原典の持つ言語の構造や言葉の選び方に、翻訳の内容を極力近づけようとする考え方。

動的等価 (dynamic equivalence)

原典の言語学的な構造を再構成するよりは、むしろ原典の言語を通して表現されている思想・概念を再現しようとする考え方。

スコポス理論

「逐語訳か意識か」という二者択一でない、聖書翻訳が用いられる文脈・目的をより重視した翻訳理論。

## 2 聖書による翻訳の違い: 幾つかの実例

### 2.1 イザヤ書における「ツェダーカー」 צְדָקָה

・通常の訳は「正義」

・しかし、新共同訳で異なる仕方で訳されているところがある。例として、イザヤ書 45 章 23 節。

→「わたしの口から恵みの言葉が出されたならば／その言葉は決して取り消されない」(新共同)

→「私の口から正義の言葉が出たら／その言葉は取り消されることはない」(協会共同)

→「ことばは、義のうちに私の口から出て、決して戻ることはない」

・辞書によると (DCH など)、「ツェダーカー」には「正義」だけでなく様々な意味がある(「救い」、「優しさ」その他)。意味の幅を箇所ごとに判断して訳すのか、それとも決まった訳語を当てて、読者がその意味の幅を認識するよう努めるのか?

### 2.2 哀歌 5 章 22 節 (21 節後半からの訳を提示)

כִּי אִם-מָאֵס מְאִסְתָּנוּ קִצְפַּת עָלֵינוּ עַד-מָאֵד:

・主要な日本語訳三つがすべて異なる訳を示している。

→「私たちの日々を新しくして／昔のようにしてください。／あなたは激しく憤り／わたしたちをまったく見捨てられました」(新共同訳)

→「私たちの日々を新たにし／昔のようにしてください。／それとも、あなたは私たちをどこまでも退け／激しい怒りのうちにおられるのでしょうか」(協会共同訳)

→「昔のように、私たちの日々を新しくしてください。／あなたが本当に、私たちを退け、／極みまで私たちを怒っておられるのでなければ」(新改訳 2017)

・訳がここまで異なる理由: 22 節の「キー・イム」の理解の仕方

→「キー」は「実に」あるいは「何故なら」の意味。裁きが現実に起こってしまった。新共同訳? (cf. LXX) JPS TNK など。

→「イム」は「もし」の意味。裁きは仮定の話。NEB など

→では「キー・イム」というフレーズの意味は? 辞書によると…

unless (～でなければ) 裁きは仮定の話。新改訳 2017、ESV、NIV、NRSV など。

even though/although (～であるにもかかわらず) 裁きは現実に起こったが、主眼はむしろ前節の嘆願にある。R. Gordis (JBL 93/2 [1974]: 289-

293)など。

→協会共同訳（他 RSV、EÜ など）の訳（or+疑問文）は以上のどれを根拠にしている？

### 2.3 イザヤ書 53 章 11 節（前半）

#### מַעֲמַל נַפְשׁוֹ יִרְאֶה יְשׁוּעָה

・単語の意味の幅の問題や、文法理解の問題ではなく、本文批評的問題（複数の写本。古代語訳を比較検討して、オリジナルな本文を回復しようとする研究）。

・次のような違いがある。

→「彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する」（新共同訳）

→「彼は自分の魂の苦しみの後、光を見／それを知って満足する」（協会共同訳）

→「彼は自分のたましいの／激しい苦しみのあとを見て、満足する」（新改訳 2017）

・ヒブル語原文においては、「見る」という動詞の目的語が欠けているように見える。「苦しみ」を目的語にすることは可能か？（新共同訳、新改訳 2017）

・ギリシャ語訳、クムラン写本には「光」אורという語がある。しかし、より後の時代の中世のヘブライ語聖書の写本にはこの語はない。

・以上のデータから、元々の本文をどのように考えるか。ギリシャ語訳、クムラン写本に存在していた「光」の語が、何らかの理由でなくなった？あるいは別の説明？

・「光」は何を意味するのか？復活との関係？（cf. ダニ 12:3）

#### 参考文献

大島力他編『ここが変わった！「聖書協会共同訳」』日本キリスト教団出版局、2022 年。